平尾山古墳群

－新規青少年施設候補地試掘調査－

1995年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市の東山地区は、大阪府と奈良県の県境を南北に走る生駒山地の南端部の丘陵に位置し、いまなお多くの自然環境が遺されており、山々の草木は四季折々の装いで人々の心に憩いと安らぎを与えるグリーンゾーンとなっています。

東山に立つと、眼下には奈良県に源を発する大和川が石川を合わせて西の方堺に流れ、はるか大阪湾には船舶が航行し、湾岸に沿っては近代建築や高速道路が、あるいは本年度開港した関西空港が一望できます。この素晴らしい景観と自然環境を取り入れた東山の一画に大阪府立の新規青少年施設の候補地が選定されたことから、柏原市は平成4年度に古墳の既存状況を確認するため分布調査を行い、平成6年度には試掘調査を実施いたしました。ここには古墳時代に築造された古墳群があり、大和川流域の集落遺跡の支配者層が埋葬されていると考えられています。この地域は平野・大県支群と雁多尾畑支群のエリアに入るため、この地区には古墳を始めとして新規に文化財がどのような状態で遺存しているのかを確認するため試掘調査したものであります。既に精密な分布調査が行われて多数の古墳が存在していることが確認されていますが、古墳などが存在していない空白地域が割合に広い地域に広がっており、実際に古墳等が存在しないのかどうか先の趣旨にそっておもに古墳の存在確認を主目的として実施したものであります。

調査結果は、本書に報告するとおり、古墳の新規発見がありましたが、古墳の存在が希薄な地区もあり、青少年施設の位置と配置を考慮して古墳の保存と公開等を取り入れて行くことが出来れば、この地域は社会教育行政の観点から良好な野外活動施設の環境であると確信します。

本年度は、近年稀にみる小雨高温の日々が続き、荒廃地における草木の蔓延る時期の調査でありましたが、調査に対しご理解とご協力を頂いた土地所有者と地元の方々、調査関係者には深く感謝申し上げます。これを機会に、今後ともより一層の文化財保護へのご支援とご協力をお願い申し上げます。

平成7年3月

柏原市教育委員会

教育長　庖　刀　和　秀

例　　言

1．本書は、柏原市教育委員会が平成６年度に実施した大阪府の新規青少年施設の候補地に伴う半尾山古墳群試掘調査の概要報告書である。

2．試掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化係　北野　重を担当者として平成６年６月21日から平成６年９月12日まで実施した。

3．試掘調査と本書作成にあたって、土地の立入等にご協力いただいた土地所有者、地元の人々及び各地区区長と代表者に厚く御礼申し上げます。また、帝塚山大学考古学研究所所長　堅田　直教授には測量機器システム「カタタ」の講習会の開催と実地のご指導等、大阪府教育委員会文化財保護課　井藤　徹参事、玉井　功係長には調査の全般にわたりご指導、藤井寺市教育委員会文化財保護課　山田幸弘技師、松原市教育委員会社会教育課　岡本武司技師から「カタタ」の実際の使用方法についてのご教授、柏原市企画財務部企画調整室　石橋保昭、中川喜美治、三浦啓至から調査全般に協力を頂いた各氏に対して厚く御礼申し上げます。

4．調査協力者は、次の方々です。

米田　博	山中誠	山田寛顕	安村俊史	石田成年	寺川　款
牛駒美洋子	阪口文子	槙原美智子	山口　剛	西島信彦	百合藤厚子
椋本武司	酒井英利香	藤戸康代	乃一敏恵	有江マスミ	村口ゆき子

5．本書の編集、執筆は、北野が行った。

6．本書で使用した方位と高さは、磁北とＴ．Ｐ．である。

目　　次

第１章　調査に至る経過……1
第２章　位置と環境……3
第３章　調査の目的と方法……5
　第１節　調査の目的……5
　第２節　調査の方法……5
第４章　試掘調査結果……7
　第１節　西側地区……7
　第２節　東側地区……8
第５章　まとめ……9

挿　図　目　次

図－１　東山地区区割図……1
図－２　周辺の遺跡……2
図－３　雁多尾畑支群第17支群３号墳……8
表－１　カタタ主要機器……6
表－２　試掘調査区内の古墳の概要……9
表－３　西側地区（平野・大県支群）の古墳の概要……10
表－４　東側地区（雁多尾畑支群）の古墳の概要……10

図　版　目　次

図版－１　調査区全景（南側・東側から）
図版－２　調査区各地区（西側地区・東側地区）
図版－３　航空写真（西側地区）
図版－４　航空写真（東側地区）
図版－５　平野・大県支群第40支群５号墳
図版－６　平野・大県支群第40支群６号墳
図版－７　雁多尾畑支群第17支群３号墳
図版－８　第10トレンチ溝状遺構
図版－９　検出遺構（溝と焼土坑）

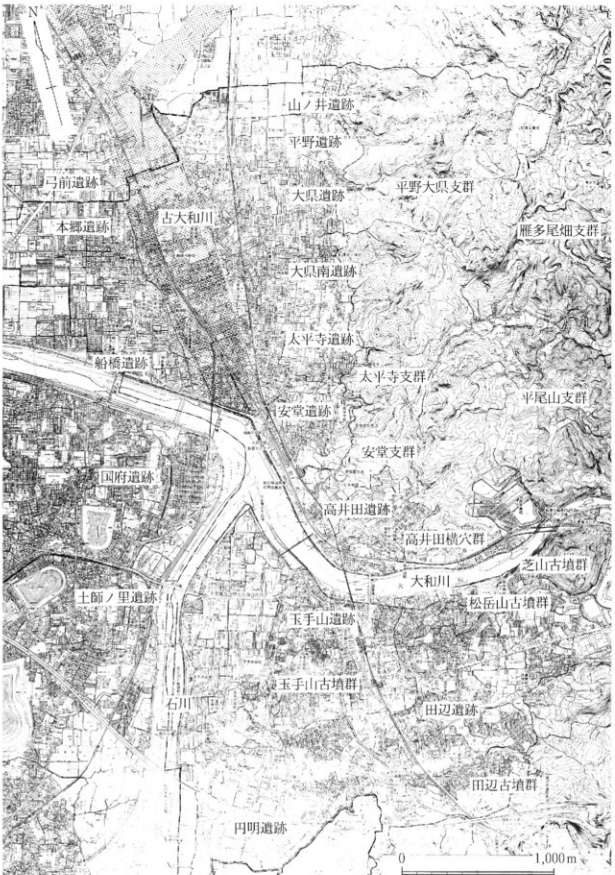
図版－10　調査地位置図（第１トレンチ伐採後風景・第２トレンチ伐採後風景）
図版－11　29区分布図（第12トレンチ伐採後風景・第14トレンチ伐採後風景）
図版－12　30区分布図（第１トレンチ掘削後・第２トレンチ掘削後）
図版－13　31区分布図（第５トレンチ掘削後・第７トレンチ掘削後）
図版－14　43区分布図（第９トレンチ掘削後・第11トレンチ掘削後）
図版－15　44区分布図（第12トレンチ掘削後・第12トレンチ掘削後）
図版－16　45区分布図（第13トレンチ掘削後・第14トレンチ掘削後）
図版－17　東山地区の古墳群の尾根と支群
図版－18　西側地区検出遺構図
図版－19　東側地区検出遺構図
図版－20　平野・大県支群第39支群４号墳
図版－21　平野・大県支群第40支群５号墳
図版－22　平野・大県支群第40支群６号墳
図版－23　調査区の結果概要と尾根構成

第１章　調査に至る経過

当該地は、平尾山古墳群と名称されている大型群集墳の中の平野・大県支群と雁多尾畑支群にあたり、これまで古墳の分布調査等する機会の少なかった場所である。今回、新規青少年施設の候補地にあげられたので、埋蔵文化財がどのような状況で存在するか事前に試掘調査を実施した。試掘調査を実施するにあたり候補地という前提の事業あることから、大阪府と柏原市が協議を行い、柏原市が事業の主体として実施し、大阪府がその補助を行うことと決定した。調査は、柏原市大県、平野、太平寺、雁多尾畑地区を含む生駒山地の丘陵上で対象面積が約300,000㎡である。対象地は、大部分が個人の所有地であるため、当事業の事前試掘調査の実施に際して地権者の同意を頂き実施した。

試掘調査は、総延長1,200ｍ、幅１ｍ、深さ約30㎝の規模のトレンチで古墳等遺構の存在確認である。実施方法は、トレンチの予定場所に幅５ｍで総面積6,000㎡の下草の伐採を行った後、掘削場所を設定して各土地所有者に再度了承を得て掘削作業に取りかかった。トレンチの設定は、大阪府青少年課、同府文化財保護課、柏原市企画調整室、同市社会教育課と協議し決定した。現地での伐採、掘削、遺構検出、実測、埋め戻し等作業は、平成６年６月21日から平成６年９月12日までの期間で実施した。遺構は、古墳の主体部である石室、周溝の一部と考えられる溝、土抗、焼土抗等を検出した。遺物は、土師器、須恵器、鉄釘等が出土した。

図－１　東山地区区割図


N
山ノ井遺跡
平野遺跡
弓前遺跡
大県遺跡
平野大県支群
本郷遺跡
古大和川
雁多尾畑支群
大県南遺跡
太平寺遺跡
船橋遺跡
太平寺支群
平尾山支群
安堂遺跡
安堂支群
国府遺跡
高井田遺跡
高井田横穴群
芝山古墳群
大和川
土師ノ里遺跡
松岳山古墳群
玉手山遺跡
玉手山古墳群
石川
田辺遺跡
田辺古墳群
円明遺跡
0
1,000m

図－2　周辺の遺跡

第２章　位置と環境

柏原市は、大阪府の東南部に位置し、大阪府と奈良県の間に連なる生駒山地の麓にあたり、広ぼう東西方向6.60km、南北方向6.63kmを測る、大阪府下30市中第19番目の面積（24.77km）を擁する小都市である。

行政区分は、奈良県と境を接する内陸部にあり、奈良県東側は、北から三郷町、王子町、香芝市があり、大阪府西側は、北から八尾市、藤井寺市、羽曳野市が接している。

交通は、近鉄大阪線、近鉄道明寺線、ＪＲ大和路線、国道25、165、170号線、西名阪自動車道がある。道路等交通網の発達は、自動車産業の発展とともにその沿線地域の産業や交通に著しい原動力を与えるが、柏原市もこの例えに漏れず産業や交通の要所となり発展しつつ大阪近郊の衛星都市として住宅街の様相も呈している。また、河川として大和川と石川があり、前者は奈良県下の小河川を集めて生駒山地と金剛山脈を区切るように大阪平野へと流れ出ているその根幹部にあたり、後者は金剛山脈の水を集めて市内中程で大和川と合流している。

柏原市内の遺跡群は、大きく三分割すれば、生駒山地及びその西麓部の遺跡群と古大和川より以西の沖積部の遺跡群、大和川以南の遺跡群がある。それぞれの遺跡群は、地形的な制約から遺跡の時期や性格或いは種類で異なっている。

自然環境として、丘陵部と河川、平野があって古代から狩猟、漁撈、採集生活に適した地域であったことは自明である。時代毎にそれぞれの概要を述べたい。

旧石器時代の遺跡は、府下の遺跡群には、二上山、生駒山西麓、富田丘地、大阪湾東岸、羽曳野台地の５つの遺跡群がある。近年、羽曳野台地遺跡群は、国府遺跡、はさみ山遺跡、林遺跡、十師ノ里遺跡、翠兆園遺跡等があり、竪穴状住居や石器製作工房等の遺構が検出されている。生駒山西麓部遺跡群は、標高10～100ｍの丘陵斜面から有舌尖頭器等の石器が希薄ではあるが点在して出土している。

当地域での縄文時代は、生駒山地西麓部の遺跡は、平野遺跡、大県遺跡、大県南遺跡、太平寺遺跡、安堂遺跡等があり、特に大県遺跡から早期、前期、中期、後期、晩期の全期における遺物が出土する当遺跡群の中では拠点的遺跡である。大和川以西の遺跡群は、船橋遺跡、本郷遺跡等から前期から晩期にかけての土器が出土しているが、集落の全体像は明確でない遺跡が多い。

弥生時代は、縄文時代から継承して集落が営まれ多くの遺構と遺物が出土している。山ノ井遺跡、平野遺跡、大県遺跡、大県南遺跡、太平寺遺跡、安堂遺跡が大県遺跡を中核として母子村を形成している。大県遺跡の後背地に高尾山高地性集落が形成され今後その関連性が問われる遺跡である。また、渡来遺物と考えられる多鈕細文鏡が出土していることでも著名である。

古墳時代は、弥生時代の集落構成がそのまま成長して集落遺跡が営まれる。特に古墳時代中期から後期にかけて鉄器製作の鍛冶工房が当遺跡群から、竪穴工房、覆屋、金床状遺構等の遺構に伴って鉄滓、鞴羽口、砥石等の遺物が大量に出土している。各集落単位での消費を賄う量ではなく、河内平野一帯の集落遺跡或いは規模の大きな政治的な繋がりを持つ共同体（大豪族）、又は国家的統

制の官営工房とも考えられている。

平尾山古墳群は、大阪府下最大の古墳時代後期の群集墳で現在までに約1,500基以上の古墳が確認されている。言いかえれば、古墳築造が出来る身分を持つ人々がこの地域周辺部に生活圏があり、大和政権下での優位な地位と身分を持つ氏族があったことが否定出来ない。地形的な観点から大きく三分して生駒山地西麓部の集落に近い立地の平野・大県支群、太平寺支群、安堂支群、高井田横穴群と生駒山地丘陵内に立地する雁多尾畑支群、平尾山支群、青谷支群と最後に奈良県に入る生駒山地東麓部の集落に近い丘陵部の本堂支群に分けられる。

平野・大県支群は、生駒山地西麓部に近い古墳群で丘陵北東部に位置し、東西方向1,600ｍ、南北方向2,000ｍの範囲に築造されている古墳時代後期を中心とした古墳が群集している。支群は、42支群235基が判明している。この支群は、高井田から北東方向に伸びた大きな谷川水系の以西の丘陵部に在り、更に集落に近い丘陵斜面の支群と丘陵尾根部又はその東部にある支群とが存在して５ツのグループに分かれる。この支群の調査は、近年の開発によって次第に明らかになりつつある。古墳に埋葬されている遺物である鉄滓や朱記号を持つ須恵器の存在から鍛冶を専門に行う大県遺跡群から検出されている集落との関わりが実証されつつある。また、第20支群３号墳は、石室内部は後世の盗掘により遺物が多く持ち去られていたが、羨道や石室隅部から須恵器38点、土師器６点、環頭、馬具３点、鉄鏃２点以上、釵子、玉類、釘類、石棺片等が出土した。主に７世紀代の遺物が多く、環頭やミニチュア竈は被葬者の性格を知る貴重な資料である。

雁多尾畑支群は、平野・大県支群の東側に位置し丘陵内に立地し、東西方向2,400ｍ、南北方向2,000ｍの範囲を持つ古墳時代後期の古墳が群集している。支群は、第56支群445基の古墳が確認されている。この支群は、谷川水系と市道安堂畑線、畑大池線に囲まれた一群と三郷町から西へ深い谷が入るその両側丘陵部にある一群とに分かれる。これまで25基の古墳内部を調査して、横穴式石室墳中心であるが、横口式石槨墳、小石室墳、木棺直葬墳、木炭槨粘土室墳と石室形態がバラエティに富んでおり、出土遺物にも特異な鉄鋏、釵子等があって古墳時代終末期の古墳である横口式石槨や小石室等と被葬者の性格や身分的位置付けが求められている支群である。

飛鳥から奈良時代にかけて多数の古代寺院が建立される。三宅寺、大里寺、山下寺、智識寺、家原寺、鳥坂寺の６寺は、河内六大寺と呼称され歴代の天皇が参拝された事が続日本紀等の文献に記載されており、河内六寺の参拝に投宿された行宮が智識寺南行宮、竹原井行宮とも伝えられ、現在までにその関連遺構が検出されている。それぞれの古代寺院は、平野遺跡、大県遺跡、大県南遺跡、太平寺遺跡、安堂遺跡、高井田遺跡が対応している。寺院の位置については、現在に遺存する礎石や瓦等の遺物や字名、発掘調査による墨書土器の出土から概略が想定されている。また、大和川以南には片山廃寺、原山廃寺、五十村廃寺、円明廃寺、田辺廃寺、河内国分寺、国分尼寺、東条尾平廃寺等が造営される。このことは、古墳時代後期から奈良時代にかけて大和政権の中で相当の地位を嵩えた古代氏族が建立したものと考えられる。

第３章　調査の目的と方法

第１節　調査の目的

この調査の目的は、大阪府立の新規青少年施設の候補地内における文化財がどのように存在しているか実際の試掘調査によって、その現状を把握することである。この地域の一部は、平成４年度に柏原市教育委員会が分布調査を実施している。この調査で新規の古墳を多数発見しているが、今回はさらに古墳等が存在しているか確認することである。

第２節　調査の方法

調査地区は、柏原市東山丘陵上で東西地区に２分される。西側地区（図版18）は、中央の枝尾根と枝尾根から分岐した小枝尾根に第１トレンチから第８トレンチまで設定した。東側地区（図版19）は、枝尾根と小枝尾根に第９トレンチから第15トレンチを設定した。西側地区は、平成４年度の分布調査を実施した範囲内であるが、東側地区は範囲外である。現状は、田、畑地、山林に分かれるが、大部分は荒廃地で通る道の確保が困難な状態で、伐採後も土地所有者すら判別困難なくらい下草と木々が蔓延っている。

試掘調査は、伐採、掘削、遺構検出、写真撮影、測量、埋め戻しの手順で実施した。伐採は、試掘調査の予定場所に幅５ｍで総面積6,000㎡を行った。掘削は、総延長1,200ｍ、幅１ｍ、深さ約30㎝のトレンチである。トレンチの測量杭の設定は、３，４級の基準点を設定し、遺跡調査汎用システム「カタタ」を活用し実施した。

基準点の設定は、地域内に34点を設定した。西側地区18点、東側地区16点である。

カタタの使用は、今回の試掘調査で大変活躍した。

調査を行う前提として五つの条件があり、これらの諸問題を解決するためには調査体制の整備が必要であるが、今回の調査に対して「カタタ」を導入し、その利点として前提となった諸条件について次のことが云える。

一つ目は、調査地区内の木々の切り取りは行わず下草の伐採だけである。木立のある地区がトレンチの設定場所で西側８割、東側２割を占めるので航空測量をおこなっても成果が限定的である。カタタは、林立する木立の中では有効な手段である。

二つ目は、30ha という広大な調査範囲で調査地区が離れた丘陵部が数箇所に及ぶこと。丘陵部の尾根を中心として稜線上や山腹にトレンチを設定するから各地点間のつながりを掴む必要があり、調査費用や調査日数の面から制約がある。カタタは、直線的なトレンチが多く作業能率は良好であった。

三つ目は、調査の範囲が幅１ｍ、長さ1,200ｍと長いトレンチ調査であること。木立の中で標高差が激しく柏原市の文化係が装備している調査機器では長期間の測量日数が必要である。カタタは、木々によって遮られる場所は困難であるが径15㎝のターゲットを覗くことが出来れば測量可能であったので利便である。測量する期間が短期間で実施出来た。

四つ目は、この事業が計画段階で古墳の正確な位置や標高が求められれば図示する必要があること。古墳等の遺構が検出されれば正確に記録し、位置付けなければならないが、実測や測量を行うにはその技術と経験を持つ人員が要求される。カタタは、設定を間違えないかぎり正確な測量が出来た。

五つ目は、調査期間が3ケ月という短い期間であること等の条件から測量を行うに当たって正確さと調査日程の短縮が求められた。遺構の種類をどのように処理するか事前に取り決めておけば基本的な作業は簡単に行える。

カタタ遺跡汎用システムの主な機器内容は、下記の通りである。

	外業作業器材		内業作業器材
1	遺跡汎用システム	1	マックコンピューター
2	コンパクト反射プリズム	2	レーザープリンター
3	光波トランシット	3	自動製図機
4	電子野帳	4	14カラーディスプレイ
5	プリンター	5	トータルステイション接続コード

表－1　カタタ主要機器

第４章　試掘調査結果

第１節　西側地区（図版－18）

今回実施した試掘調査の結果について報告する。対象地が西側地区（図版－18）と東側地区（図版－19）２ケ所に及ぶので地区別に各トレンチの概要を説明したい。

西側地区は、南北方向の枝尾根１本とそれから派生した北東から南西方向の小枝尾根５本以上から構成している。第１～８トレンチを設定し総延長700ｍを掘削した。遺構は、古墳の石室２基、溝24条、土抗１基、焼土抗３基を検出した。24条の溝の内、付近の地形から古墳の周溝となる可能性がある溝は14条で、12ケ所の古墳の可能性がある。

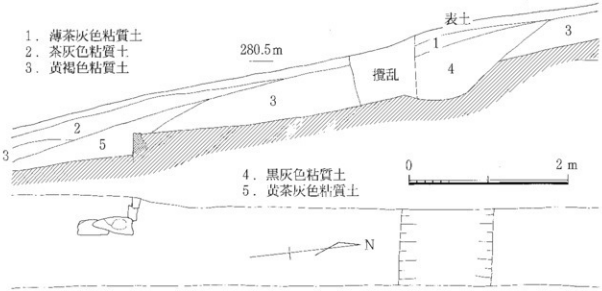
第１トレンチは、枝尾根から南西方向に伸びた小枝尾根上に設定した。果樹園畑となっており、遺構は発見されなかった。第２トレンチは、枝尾根から南西方向に伸びた小枝尾根上で遺構は検出されなかった。第３トレンチは、枝尾根から南西方向に伸びた小枝尾根上に設定した。遺構は、溝８条検出し、７条が周辺の状況から６ケ所の古墳の可能性が考えられる。この小枝尾根は、平野・大県支群の第33支群にあたり、山頂に１基、尾根筋又は山腹に３基の古墳が確認されている。
山腹の１基は規模が約15ｍあるがその他の古墳は10ｍ以下の小古墳である。第４トレンチは、枝尾根から西側に伸びた小枝尾根筋に設定した。既存の古墳が３基存在しているが、その古墳の石室と周溝の一部を確認した。遺構は、溝５条を検出し、その内古墳の溝の可能性がある溝が２条ある。この枝尾根は、平野・大県支群第39支群で、山稜部に１基、尾根筋に３基の古墳がある。いずれも石室が完存又は半壊状況で確認された。山稜部の１号墳は、径13ｍの羨道部分が半壊以外はほぼ遺存している。４号墳は、現状で遺存状況が明確でなかったのでトレンチにかかる部分で上面の掘削を行った。大井石が１石遺存し果樹園の石垣に抜き取られた石も多い径７ｍの古墳である。石室は、長さ約3.5ｍ、幅1.2ｍの小石室である。石室の北側約１ｍの場所に周溝の痕跡を確認した。２号墳は、ほぼ完存している。３号墳は、石室は崩壊しているが石材は遺存し、墳丘の土層がほとんど流出している。第５トレンチは、枝尾根上の北側部分に設定した。果樹園畑の跡地で後世の攪乱があり地形が変形している。遺物が少量出土した。第６トレンチは、枝尾根上に設定した。土抗状の落ち込みを確認したが、時期が新しい掘り込みである。第７トレンチは、更に南側で枝尾根上に設定した。既存の古墳が２基あり、１基は石材が散乱している古墳の溝を確認し、１基は墳丘の一部損壊しているが石室はほぼ完存している。遺構は、溝２条、焼土抗１基、溝は既存の古墳の周溝と考えられるもの１条、古墳の墳丘盛土と考えられる土層１ケ所を確認した。第８トレンチは、枝尾根の最も南側である。新たに検出した石室２基、溝６条、焼土抗２基を検出した。溝４条は、古墳の周溝の可能性がある。この枝尾根は、平野・大県支群第40支群で南西方向に伸びた小枝尾根に４基の古墳が確認されている。今回発見した５，６号墳は、枝尾根上に並列していた。５号墳は、石室の大部分の石材が抜き取られ、わずかに石室と確認出来る状態の古墳である。規模は、６ｍ位の小型の古墳である。石室の規模は、長さ約4.5ｍ、幅1.2ｍを測り、最大１ｍ大の割り石を使用している。６号墳は、墳丘は明確でなかったが石室は恐らく完存している。トレンチの掘削前に石材が一

部露出していた状態で墳丘部分は後世の削平を受けていた。石室規模は、長さ2.5ｍ以上、幅約1.5ｍである。墳丘規模は、６ｍ前後で小型の古墳である。他の古墳の可能性がある溝もこのような古墳であろう。

第２節　東側地区（図版－19）

東側地区は、枝尾根と小枝尾根に分かれる。第９～15トレンチがあり、総延長500ｍを調査した。遺構は、古墳の石室１基、溝８条、焼土抗８基、土抗４基がある。溝は、古墳の溝１条、古墳の可能性がある溝１条、古墳とは関係のない溝６条である。

第９トレンチは、北東から南西方向の枝尾根上に設定した。遺構は、焼土抗４基を確認した。第10トレンチは、北西から南東方向の枝尾根である。周溝と考えられる溝１条と土層から古墳の周溝と考えられる２ケ所を確認した。第11トレンチは、小枝尾根から南側に伸びた小枝尾根上である。遺構は、確認されなかった。第12トレンチは、東西方向の小枝尾根上である。溝６条、焼土抗２基、土抗１基を検出した。溝の性格は不明であるが、畑の開墾時境界溝の設定や排水用溝の可能性がある。第13トレンチは、北東から南西に下向した小枝尾根上である。遺構は確認されなかった。第14トレンチは、ほぼ東西方向の小枝尾根上である。土抗２基、焼土抗２基を検出した。第15トレンチは、南向きの斜面地に設定した。古墳１基の周溝と石室の一部を検出し、雁多尾畑支群第17支群３号墳とした。周溝は、約２ｍあり、方形か円形か不明である。７ｍ前後の規模の古墳である。石室は、東側壁と奥壁の一部を検出した。西側壁は確認していないが小型の古墳である。石材は、大きさ20～50㎝の割り石を使用する。周辺にもトレンチを設定したが遺構は発見されなかった。



図－３　雁多尾畑支群第17支群３号墳

第５章　まとめ

今回の試掘調査は、新規青少年施設の候補地として実施した。結果は、各主要な尾根筋に第１～15トレンチを設定し、古墳時代から歴史時代までの遺構と遺物を検出した。全体で19ケ所の支群164基の内29基の古墳がある。試掘調査での新しく確認した古墳が３基である。また、古墳の周溝となる可能性がある地点が14地点確認された。各地区別について概要を述べる。

西側地区は、今回の試掘調査では枝尾根と小枝尾根に古墳が分布する状況が判明した。新たに２基の古墳を発見した。この内、石室が見つかったのは第８トレンチから検出された２基だけである。その他に古墳の周溝の可能性があるのは12地点あった。この地区の古墳の在り方は、枝尾根の頂上と小枝尾根先、谷部の奥まった南向き斜面に古墳の存在が確認されている。支群構成は大型古墳が点在し、その周辺に小型古墳が群在するようである。分布調査及び今回の試掘調査で確認した古墳は、完存している石室も存在しているが、大部分のものは半壊状況である。これは、現状でも杭や針金が残存し、後世に果樹園や畑地として開墾が行なわれ旧地形の変形が顕著である理由による。東側地区は、北側枝尾根と南側小枝尾根があり、南側小枝尾根の第15トレンチから南側斜面に１基の古墳の石室と周溝の一部を検出、北側枝尾根に設定した第10トレンチから２ケ所の古墳の可能性がある地点が見つかった。これらは、墳丘が低い古墳で小型古墳か木棺直葬墳と考えられる。第12トレンチでは50㎝大の石が集積していた場所があり、トレンチを設定したが古墳に係わる遺構ではなかった。これらの尾根筋上での古墳の分布は、周辺での尾根筋の古墳分布と比較すれば極めて少ない。後世に果樹園や畑地として開墾がこの地域一帯で行なわれた旧地形の改変が顕著で削平された可能性もあろうが、今後その実態の確認が必要である。

一　覧	既知の古墳	石室を発見した古墳	古墳の可能性がある地点
合　計	29（160）基	３基	14地点

表－２　試掘調査区内の古墳の概要　　（　）内基数は、関係する支群の総古墳数

支群名	既知の古墳	石室を発見した古墳	古墳の可能性がある地点
14	1（4）基	0基	0地点
33	4（4）基	0基	6地点
36	(15) 基	0基	0地点
37	3（6）基	0基	0地点
38	1（1）基	0基	0地点
39	4（4）基	0基	3地点
40	4（4）基	2基	3地点
41	1（1）基	0基	0地点
42	4（4）基	0基	0地点
小計	22 (43) 基	2基	12地点

表－3　西側地区（平野・大県支群）の古墳の概要　（　）基数は、関係する支群の総古墳数

支群名	既知の古墳	石室を発見した古墳	古墳の可能性がある地点
8	(19) 基	0基	0地点
9	(9) 基	0基	0地点
10	(19) 基	0基	0地点
11	(22) 基	0基	0地点
16	(6) 基	0基	0地点
17	1（2）基	1基	0地点
18	6（6）基	0基	2地点
26	(22) 基	0基	0地点
29	(12) 基	0基	0地点
	7 (117) 基	1基	2地点

表－4　東側地区（雁多尾畑支群）の古墳の概要　（　）基数は、関係する支群の総古墳数

図版一　調査区全景

南側から

東側から

図版二　調査区各地区（西側地区・東側地区）

西側地区

図版三　航空写真（西側地区）

図版四　航空写真（東側地区）

図版五　平野・大県支群第四十支群五号墳

第40支群５号墳

第40支群５号墳

図版六　平野・大県支群第四十支群六号墳

第40支群６号墳

第40支群６号墳

図版七　雁多尾畑支群第十七支群三号墳

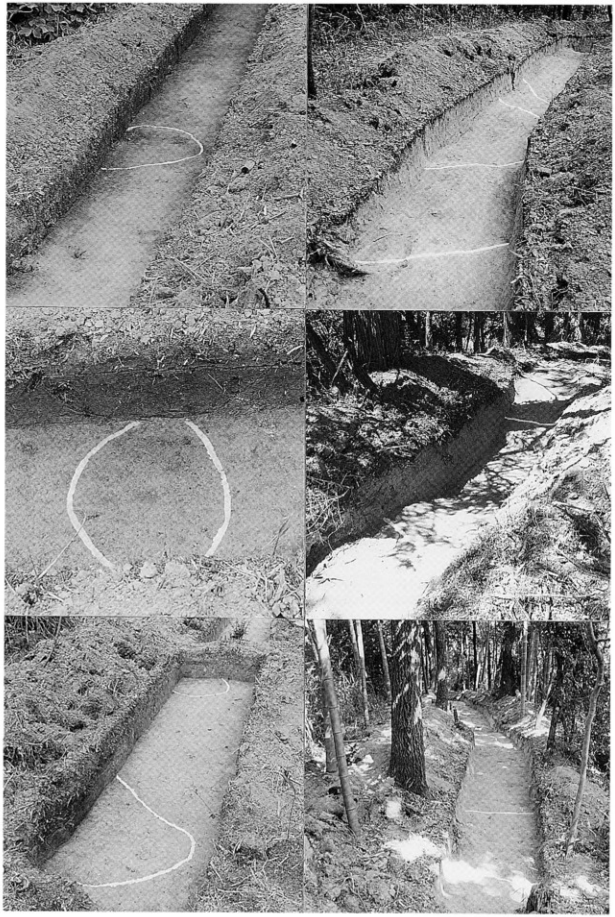
第17支群３号墳

第17支群３号墳

図版八　第十トレンチ溝状遺構

第10トレンチ溝状遺構

第10トレンチ溝状遺構



図版九　検出遺構（溝と焼土抗）

図版十　調査地位置図

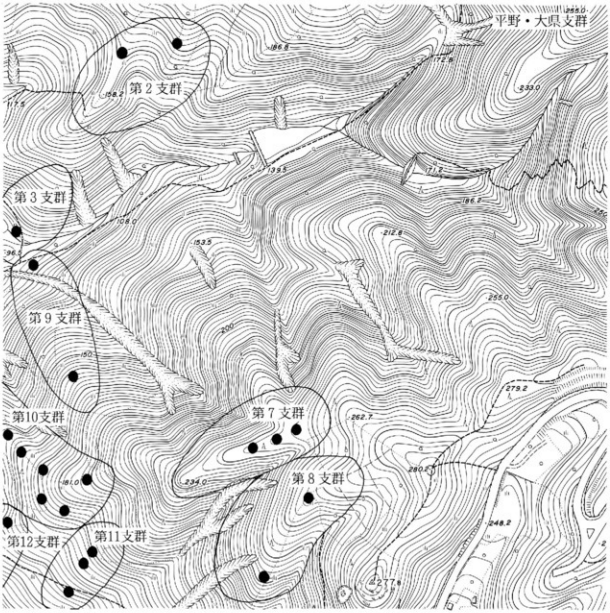
調査地位置図

0　300m

第１トレンチ伐採後風景

第２トレンチ伐採後風景

図版十一　二十九区分布図

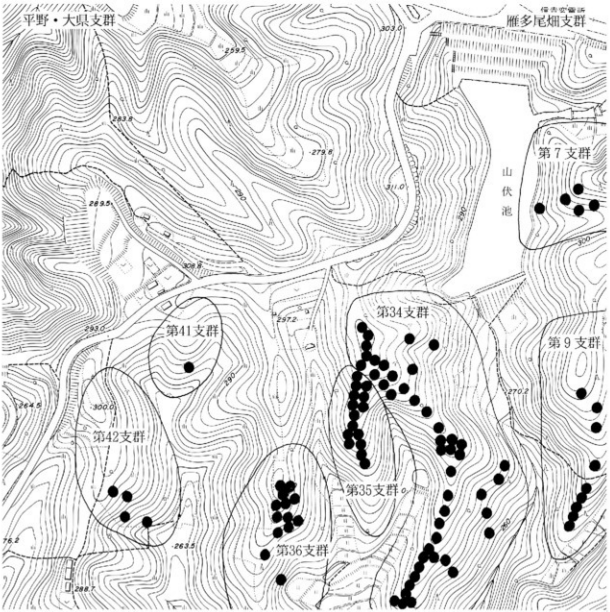


29区分布図

0　200m

第12トレンチ伐採後風景　　第14トレンチ伐採後風景

図版十二　三十区分布図

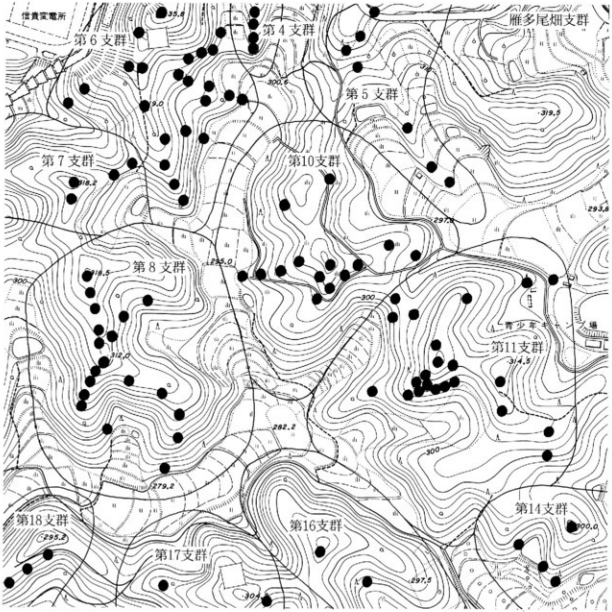


30区分布図

0　200m

第1トレンチ掘削後　　第2トレンチ掘削後

図版十三　三十一区分布図

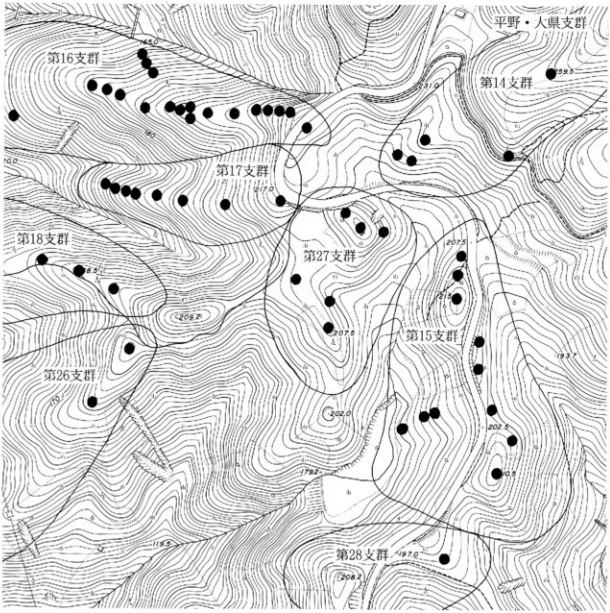


31区分布図

第5トレンチ掘削後

第7トレンチ掘削後

図版十四　四十三区分布図

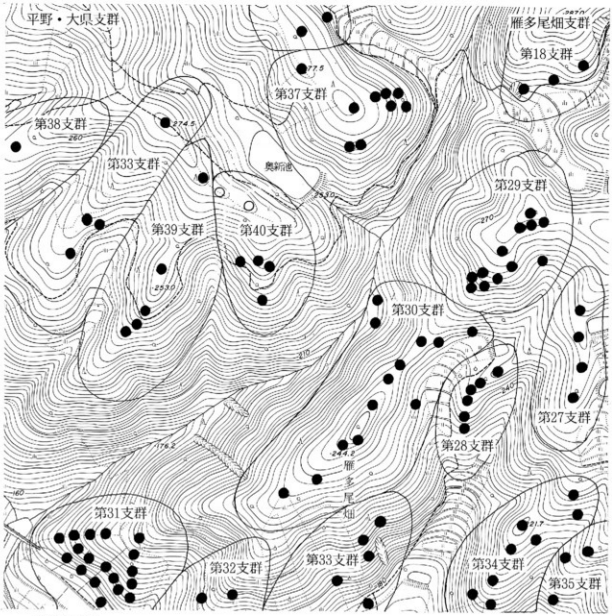


43区分布図

0　200m

第９トレンチ掘削後　　第11トレンチ掘削後

図版十五　四十四区分布図

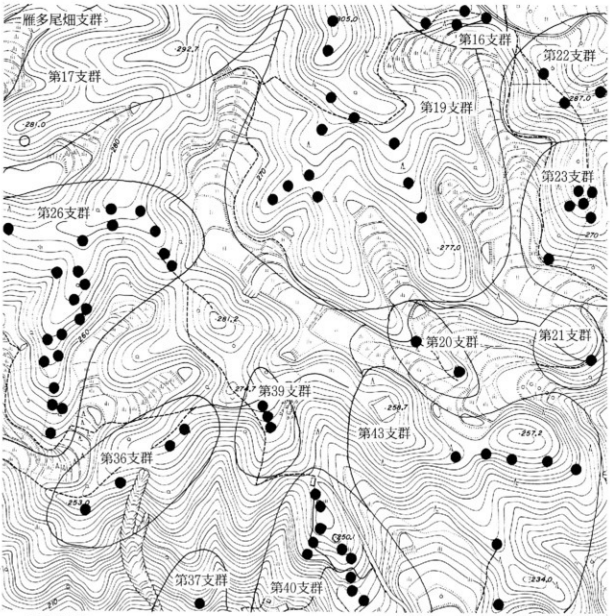


44区分布図

0　200m

第12トレンチ掘削後　　第12トレンチ掘削後

図版十六　四十五区分布図



45区分布図

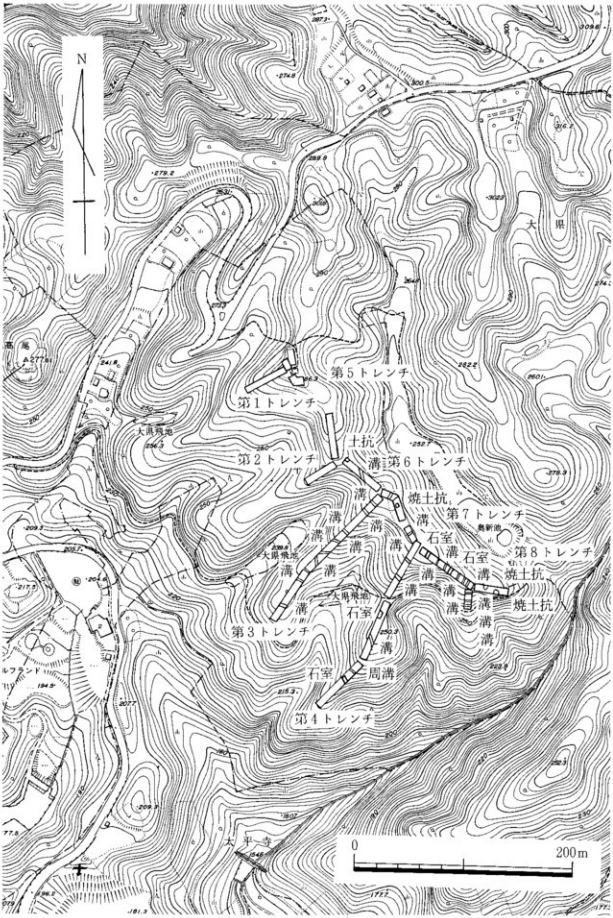
0　200m

第13トレンチ掘削後　　第14トレンチ掘削後

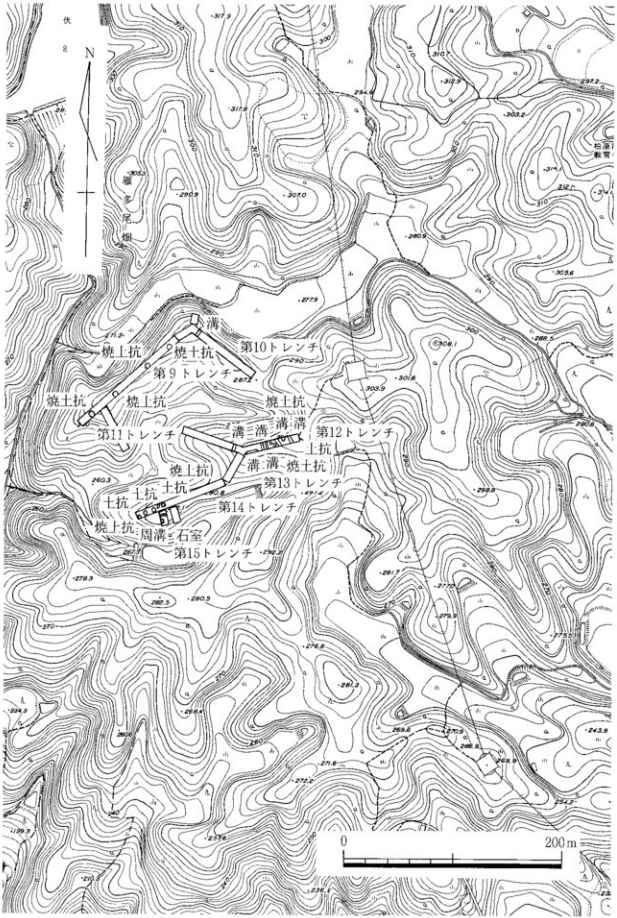
図版十七　東山地区の古墳群の尾根と支群

A．平野・大県支群
B．雁多尾畑支群
C．本堂支群
D．青谷支群
E．平尾山支群
F．太平寺支群
G．安堂支群
H．高井田横穴群
1．山ノ井遺跡
2．平野遺跡
3．大県遺跡
4．大県南遺跡
5．太平寺遺跡
6．安堂遺跡
7．高井田遺跡

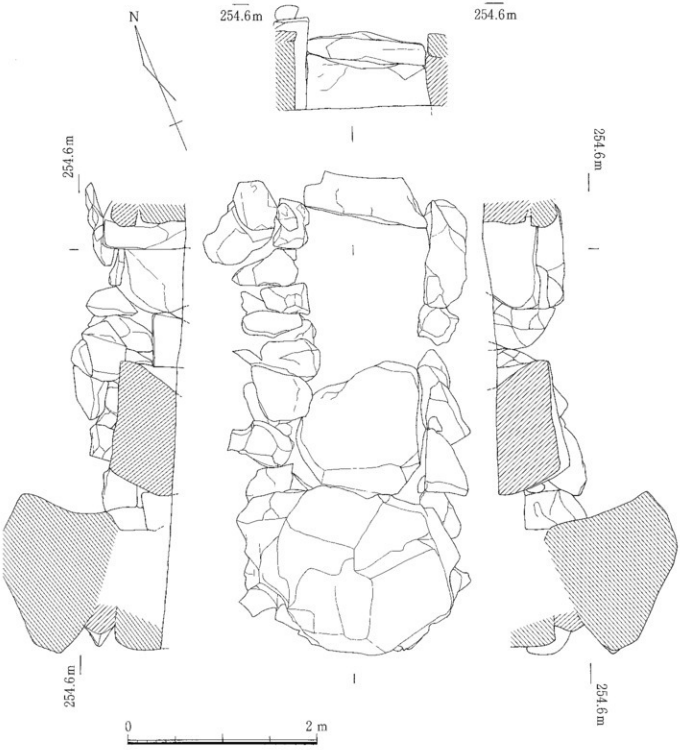
図版十八　西側地区検出遺構図



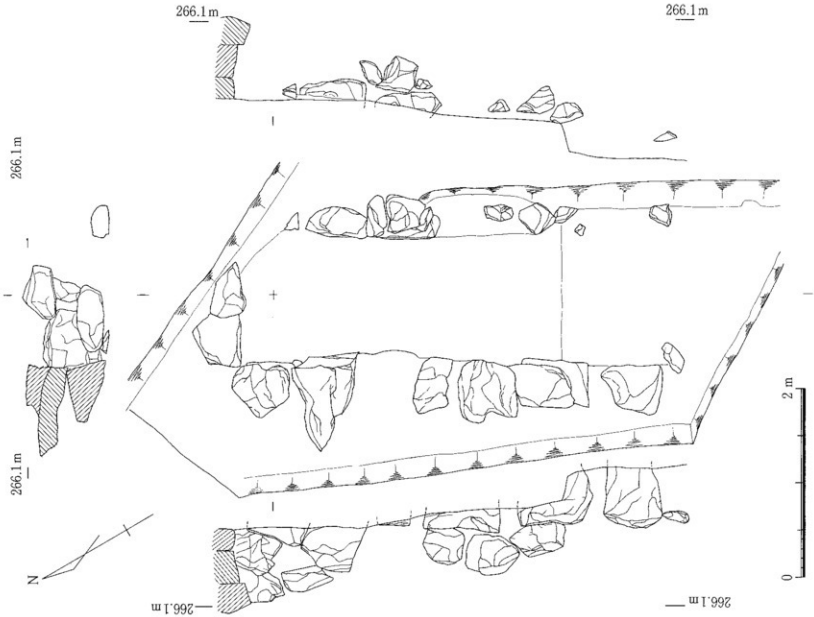
図版十九　東側地区検出遺構図



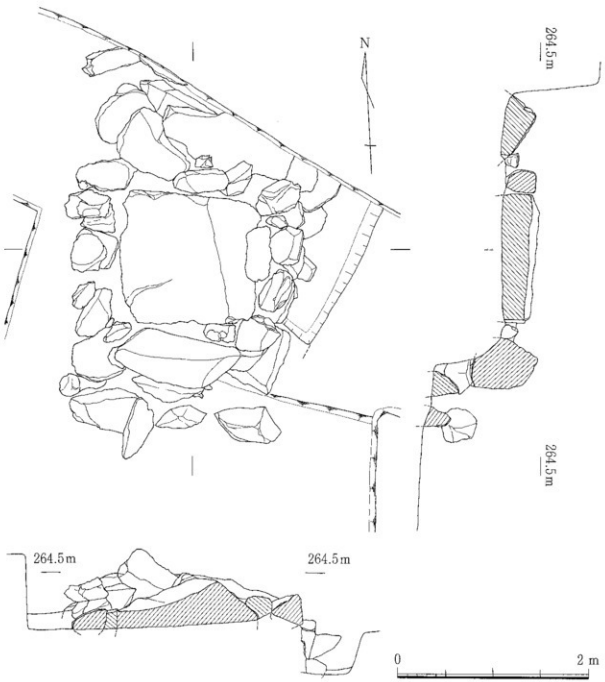
図版二十　平野・大県支群第三十九支群四号墳



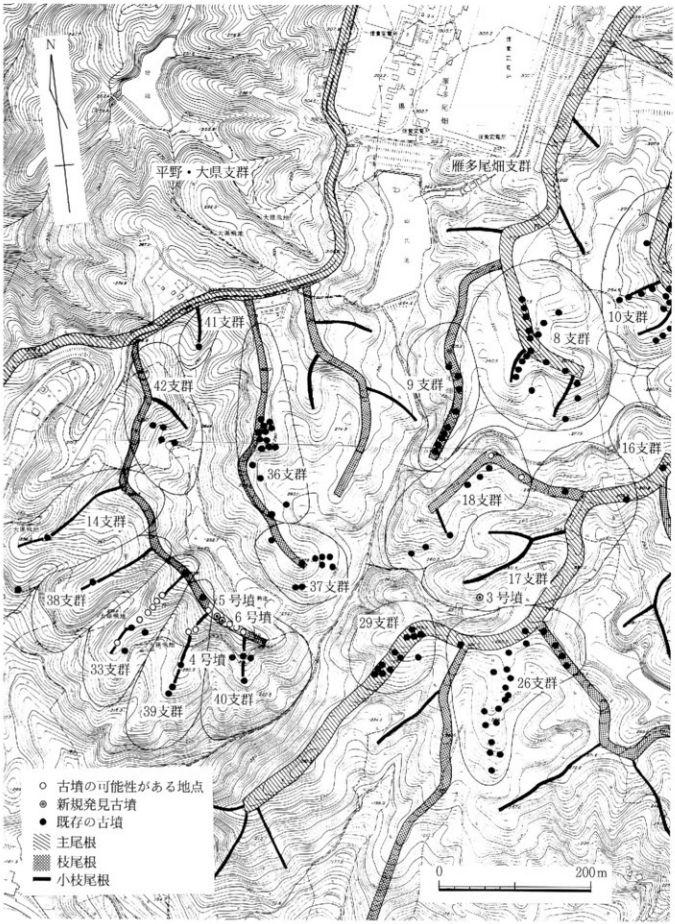
図版二十一　平野・大字支群第四十支群五号墳



図版二十二　平野・大県支群第四十支群六号墳



図版二十三　調査区の結果概要と尾根構成



平尾山古墳群

－新規青少年施設候補地試掘調査－

１９９４年度

編　　集　柏原市教育委員会
発　　行　柏原市教育委員会
発行年月日　平成７年３月31日
印　　刷　東洋紙業高速印刷株式会社